

沖縄県の大学生・短期大学生における就業意識についての基礎的研究(3) —最終学年学生の進路目標—

金城 亮・高良美樹*・廣瀬 等**

A preliminary study of college students' career awareness on Okinawa (3) : — the goal of students in their final year for a path in life —

Akira Kinjo・Miki Takara・Hitoshi Hirose

要 約

本研究は、沖縄県における大学・短期大学の最終学年学生180名を対象に、将来の進路目標を決定している群と、目標拡散群、目標未定群の3群に区分し、就職・採用内定状況、職業選択基準の重視傾向や進路選択に対する自己効力感、職業レディネスについて比較検討した。さらに、働く人のモデルの有無が進路目標の設定に及ぼす効果についても検討した。その結果、調査時点において、進路目標決定群のうち43.8%が内定を獲得しているか連絡待ちであった。一方、拡散群と未定群では、内定を獲得していない者の割合がいずれも非常に高かった(拡散群:89.3%、未定群:94.1%)。進路目標未定群は、職業選択において雇用条件を重視しがちであり、自己効力感やレディネスが未成熟であることが示された。また、進路目標を決定する上で、働く人のモデルをもっていることが重要な規定因であることが明らかにされた。

Abstract

The present study compares three groups of college students in Okinawa in their final year (those who were decided, dispersed or undecided on the goal of their course after graduation), in terms of anticipated status of employment, evaluation of the criteria for occupational choice, self-efficacy in career selection, and occupational readiness. This study also examines the effects of a personal role model on the development of a goal for their path in life after graduation. The results are as follows: out of those who were decided on the goal, 43.8% obtained an unofficial promise of employment. On the other hand, out of those who were dispersed or undecided on the goal, only 10.7% or 5.9% obtained such a promise, respectively, leaving 89.3% or 94.1% without prospect of employment fewer than two months before graduation. Those who were undecided on the goal tended to attach greater weight to the terms of employment and score lower in self-efficacy and occupational readiness.

目 的

2004年度における大学・短期大学卒業者の進路の概況をみると(平成16年度文部科学省学校基本調査)、大学新卒者(548,897人)では、就職が55.8%、大学院等への進学者が11.8%、進学も就職もしなかった者が24.5%となっている。短期大学新卒者(112,006人)では、就職が61.6%、大学等への進学者が11.2%、進学も

就職もしなかった者が23.4%という内訳になっている。このように大学・短期大学新卒者のおよそ4分の1が明確な進路を決定せずに卒業している現状の背景には、不況による厳しい雇用情勢という外的要因の他に、就職活動をする学生側の就業意識の問題も指摘できる。すなわち、明確な将来展望を持たないまま進学し、学生生活において進路目標が拡散していたり、進

* 琉球大学法文学部 ** 琉球大学教育学部

路未決定のまま卒業を迎えてもニートなどの状態に留まり続け、働くことに動機づけをもたない、といった就業意識の変化が若年者就業率の低迷に関与していると考えられる。

若年者就業率の低さは、沖縄県においてとりわけ深刻な問題となっている。例えば沖縄県労働局職業安定部職業安定課による統計では、2004年度3月末における県内大学新卒者の就職内定率は54.2%、短期大学新卒者で81.8%とされている。しかしながら、これらの数値は就職希望者数を分母とした割合であり、文部科学省調査と同様に卒業生数（大学：3,372人、短期大学：639人）を分母とした場合には、大学新卒者の内定率は34.2%、短期大学新卒者の内定率は50.5%となる。大学生・短期大学生とも、同時期の全国調査を下回っている。上述の沖縄県の資料では、進学（希望）者の割合が明確にされていないが、県内における進学等の選択肢が限られていることを考慮すると、進学も就職もしないまま卒業していく者の割合がかなり大きいことは推察に難くない。沖縄県内の大学生・短期大学生が形成している就業意識の構造を明確にするともに、高等教育機関におけるキャリア発達を支援するカリキュラムの開発が急務といえよう。

若松（2001）は、進路未決定の学生の中には、高い不安傾向を持つために未決定状態に留まりがちな優柔不断（indecisive）型と、進路を決めるための情報が充分でないために未決定の状態にある未解決（undecided）型があるとした。そして、進路決定に困難を感じている進路未決定者は「どんな進路に自分は向いているのか」「その進路は本当に自分の能力にあっているのか」「自分についての情報をもっと入手するにはどうしたらよいか」など、情報や答えが得にくい問題に悩まされがちであり、特に優柔不断傾向の強い者は拡散的に新たな進路の選択肢を求める傾向があることを指摘している。

高良・金城・廣瀬（2003）は、沖縄県の大学生を対象に就業意識に関する調査を実施し、職業選択基準の構成因子として次の因子を見いだしている。すなわち“職務挑戦”、“人間関係”、“地元志向”、“雇用条件”、“勤務制度”、“社会貢献”の6因子であり、沖縄県出身学生はこれらのうち“地元志向”、“雇用条件”といった基準を重視する傾向が強いこと、女子学生が男子学生に比べて“勤務制度”や“社会貢献”を重視することなどを示した。また、4年制大学と短期大学の学生を比較した高良・金城・廣瀬（2004）では、4年制大学の学生に比べて短期大学生の方が“勤務制度”、“地元志向”、“人間関係”といった外発的報酬に関連した因子を重視していることから、短期大学生が就職する際に考慮し、特に重視するのは「職種」というより、具体性をもった「職場」であることが示唆された。こ

れら大学・短期大学という所属区分における差異のほかに、職業レディネスの高い者は“職務挑戦”、“社会貢献”、“人間関係”、“勤務制度”の各側面を重視する一方、“地元志向”の重視度が低いことが示された。また、職業選択に対する自己効力感の高い者は、相対的に“職務挑戦”、“社会貢献”、“勤務制度”の各側面を重視する傾向が明らかになった。

さらに、廣瀬・高良・金城（2004）では、大学新生を対象に所属学部・学科を単一型と多様型に区分し比較を行った。その結果、免許取得など特定の目的をもち、カリキュラムもそれに向けて組まれている単一型学部・学科（教育学部など）の学生が、卒業後の進路が幅広くカリキュラム内容も多岐に渡る多様型（国際学部など）の学生に比べ、大学や自分の将来についてより具体的な目標やイメージをもち、大学に対する期待や納得、満足の度合いも高いことが示された。

しかしながら、大学生・短大生の進路決定や就業意識を扱った従来の研究の多くが、主に学年分布や調査時期の問題から卒業・就職を間近に控えた最終学年の学生を対象としていない。また、就業意識や自己効力感と進路選択・情報探索などの認知変数間の関連分析にとどまり、客観的・具体的成果としての進路目標決定および就職（内定）情報を測定・考慮した研究はあまりみられない。

そこで、本研究では、卒業を間近に控えた時期における大学・短大の最終学年学生のうち、将来の進路目標を決定している者と、目標が拡散していて選択できていない者、目標自体が未定の者の3群間で、実際の就職・採用内定状況を比較すると同時に、職業選択基準の重視傾向や職業レディネス、自己効力感の差異を比較検討することを目的とする。

ところで、富安（1997）は、大学生の進路決定において自己効力と時間的展望が相互規定的な関連を示すことを指摘した。すなわち、未来に向けた肯定的な時間的展望が開けてくると、将来の進路決定行動の確信度としての自己効力感が高まるとした。したがって、実際の進路指導においては、進路目標の設定や将来の行動の具現化などを通じて時間的展望を持たせることが、自己効力感の高揚に有効であることを示唆している。また、淵上（1984）は、高校生の進学志望動機形成に影響を及ぼす人的影響源について検討した結果、生徒が目的意識をもって進学意思決定を行う際には、教師・父親の影響力が深く関与していることを指摘している。これらの知見から類推すると、「将来こんなふうになりたい」という働く人のモデルを持っていることは、大学生・短大生の進路目標決定においても人的影響源としての効果を持ちうるということが考えられる。また、働く人のモデルに対する同一視は、自己の将来像について肯定的な時間的展望を提供してくれると考

えられる。そこで本研究では、働く人のモデルの有無が進路目標の設定に及ぼす効果についても検討する。加えて、将来の進路目標を決定している者のうち、第一希望の内定を獲得した者と未定者として、進路選択に影響を与えた情報源や内定獲得に関する原因帰属を比較することによって、進路目標の達成を促進する要因について検討する。

方 法

1. 調査対象者

沖縄県内の3つの4年制大学に通う学生116名、および2つの短期大学に通う学生64名の合計180名。いずれも最終学年(大学4年、短大2年)の学生であった。

2. 調査方法

短期大学生については心理学関係講義の授業時間を利用して集合調査を行った。4年制大学生については、講義受講生を中心に個別に依頼して記入させたほか、ゼミ指導教員を通じてゼミ単位で依頼するなどして、留め置き法によるデータの収集を行った。

3. 質問紙の構成

1) 職業選択の各基準の重要性：若林・後藤・鹿内(1983)の職業志向尺度を参考に、語句の修正や項目の追加を施した後、因子分析により再構成を行った「職業選択基準尺度」25項目版(高良・金城・廣瀬, 2004)を用いた。各項目の評定は、「全く重視しない」(1点)～「非常に重視する」(5点)の5件法とした。

2) 職業レディネス尺度：若林・後藤・鹿内(1983)の職業レディネス尺度を参考に作成し、大学生を対象に実施した結果(高良・金城, 2001)に基づき、代表的な5項目を選定した高良・金城・廣瀬(2004)で用いられた尺度を使用した。項目は、「自分は職業の上で将来の目標があるので、それを実現させるために自分でいろいろ考えてやっっていく」「将来の職業のことについては、できるだけ考えないようにしている(逆転項目)」などを含む5項目であった。評定は、「まったくあてはまらない」(1点)から「非常にあてはまる」(4点)の4件法とした。

3) 進路選択に対する自己効力感尺度：浦上(1995)を参考に作成し、大学生を対象に実施した結果(高良・金城, 2001)に基づき、代表的な5項目を選定した高良・金城・廣瀬(2004)で用いられた尺度を使用した。項目は、「自分の将来設計にあった職業を探すこと」「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと」などを含む5項目であった。評定は、「まったく自信がない」(1点)から「非常に自信がある」(4点)の4件法とした。

4) 学部・学科選択と卒業後の進路の関係：現在の学部・学科を選択する際、卒業後の進路を考慮して選

択したかについて、「全く考慮しなかった」(1点)から「非常に考慮した」(5点)の5件法で回答させた。5) 現在の専攻・専門と就職との関係：講義・演習科目の内容が、進路を決める上でどれくらい役立つ(役立った)かについて、「全く役立たない」(1点)から「非常に役立つ」(5点)まで5件法で回答させた。さらに、現在の専攻・専門と就職との関係について、「ぜひとも専攻・専門と関連のある仕事につきたい」「なるべく専攻・専門をいかせる仕事につきたい」「就職のときはいかせなくても、将来は専攻・専門と関連のある仕事につきたい」「現在の専攻・専門と就職とは関連しなくてよい」「その他(自由記述)」の5選択肢の中から1つを選ばせた。

6) 働く(仕事をする)理由：何のために働く(仕事をする)のかについて、高良・金城・廣瀬(2004)と同様に「達成感を得るため」「自分の能力や創造性を発揮するため」「趣味や興味を仕事で実現するため」など9項目に「その他(自由記述)」を加えた10の選択肢の中から該当する項目を全て選択することを求めた。

7) 働く人のモデル：「将来こんなふうになりたい」という働く人のモデルがいるか否かを問う設問に対して「はい」「いいえ」の2件法で回答させた。働く人のモデルを想定している場合、そのモデルとの間柄を記述させた。

8) 家計の状況：家計の現状と就職に対する準備状態について検討するために、以下の4項目について回答させた。①アルバイトの有無、②卒業後すぐに就職しなくても生活費は大丈夫か、③卒業後すぐに就職して家族の家計を助ける必要性、④卒業後の進路を決めないまま卒業した場合、就職先を世話してくれる家族や知り合いはいるか。

9) 卒業後の進路目標決定状況：卒業後の進路について、図1に示すように、進路目標の決定状況(決定・拡散・未定)、②過去一年間の準備・活動の有無、③現状(第一希望内定決定・内定連絡待ち・内定未決定)を段階的に問う一連の質問群を設定した。

さらに、進路目標を決定している者のみを対象として以下の質問群に回答させた。

10) 進路決定に寄与した情報源：進路決定にあたって、どのような情報源が役に立ったかに関して、「就職情報誌の記事」「就職/採用/進学/留学先が提供する募集要項」「大学就職課の情報」「インターネットにおける検索情報」「指導教員からのアドバイス」「先輩・友人からのアドバイス」「両親・親戚からのアドバイス」の7項目について、それぞれ「全く役立たない」(1点)から「非常に役に立った」(5点)の5件法で回答させた。

11) 就職・採用内定達成のための帰属要因：就職・採用内定に関して「あなたの就職・採用が内定すること、次にあげることがらはどれくらい関連している

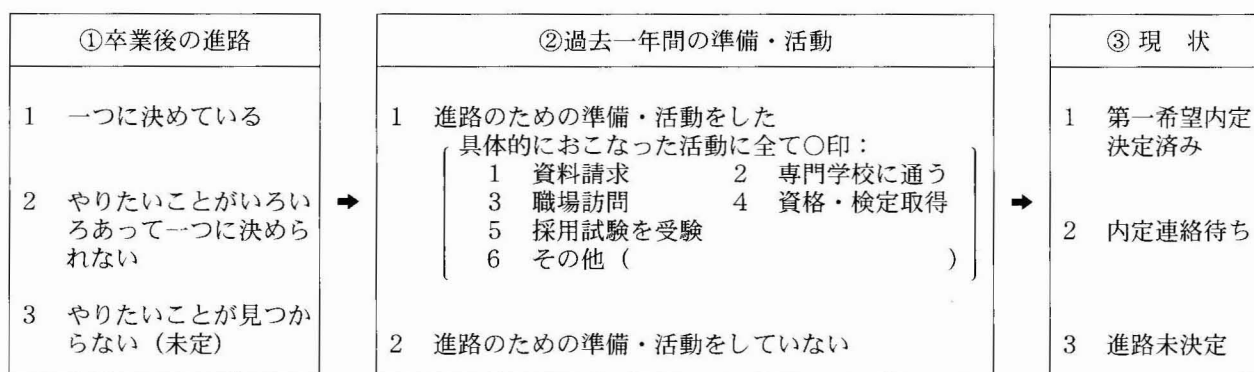


図1 卒業後の進路目標決定状況についての質問項目

としますか」という質問のもとに、次の8項目を帰属因として提示した。すなわち「試験・面接の難易度」「試験・面接当日の頑張り」「自分の適性・能力」「運の良さ」「試験・面接当日の体調・気分」「日頃の努力の積み重ね」「採用・面接試験問題の傾向」「先生・親の助け」の8項目であり、それぞれについて、就職・採用内定獲得との関連の度合いを「関連していない」(1点)から「非常に関連している」(5点)の5件法で回答させた。

その他、調査対象者全員を対象に年齢、性別などの個人的属性を回答させた。(質問項目の詳細については付録参照)。

4. 調査時期

2004年1月下旬～2月初旬。

結果と考察

1. 調査対象者の属性

不明・無回答による欠損データを除く有効回答者の内訳は、大学4年生が114名(男性68名、女性46名)、短大2年生が62名(男性0名、女性62名)であり、平均年齢21.28歳(範囲:19～24歳)。93.9%が沖縄県出身の学生で占められている。なお、欠損値のあるケースがあるため、分析によって度数が異なる場合がある。

上に示すように、本研究における短大生サンプルは全て女性であり、廣瀬・高良・金城(2004)の分類における単一型の学部・学科と多様型の学部・学科が混在している。一方、大学生サンプルでは、男女の構成比率がほぼ6:4であり、ほとんどが多様型のカリキュラムをもつ学部・学科所属の学生である。このようにサンプリングが十分に統制されていないため、以下の進路目標の決定状況や就業意識等に関する分析では、性別の効果と所属学部・学科の特性の効果が交絡している可能性がある。それらの要因の系統的影響も考慮しつつ結果の解釈を慎重におこなう必要がある。

2. 卒業後の進路に関する認知

1) 何のために働く(仕事をする)のか

調査対象者自身は、何のために働く(仕事をする)のかについて、提示した選択肢から選択させた結果(複数選択可)、全体として選択度数が最も多かったのは「自分や家族の生活の糧を得るため(79.4%)」であり、次に「余暇や趣味に使うお金を得るため(56.7%)」であった。働く理由の第一義には、お金を稼ぐという経済的理由が上位を占める結果となった。これらに次いで多いのは「自分の能力や創造性を発揮するため(48.3%)」、「趣味や興味を仕事で実現するため(43.9%)」という自己実現に関する理由であった。その他、「社会の一員として認められるため(36.7%)」、「達成感を得るため(33.9%)」、「地域や社会に貢献するため(29.4%)」、「職場の人々や顧客との交流のため(27.2%)」、と続いている。「働かないのは世間体が悪い」という外的圧力を理由として選ぶ者は10.6%と相対的に少なかった。

働く理由について大学生と短大生の回答で有意な差異があったのは、「余暇や趣味に使うお金を得るため(大学:65.8%、短大:41.3%; $\chi^2(1)=9.957, p<.01$)」および「社会の一員として認められるため(大学:31.6%、短大:47.6%; $\chi^2(1)=4.46, p<.05$)」であり、前者の理由は大学生の選択者が相対的に多く、後者の理由は短大生の選択率が高い。

2) 学部・学科選択と卒業後の進路

大学・短大における学部・学科を選択する際、卒業後の進路を考慮して選択したか否かについて、考慮の程度を5段階で評定させた。全体平均は3.46($SD=1.32$)で、卒業後をある程度考慮していると考えられるが、所属区分で比較すると大学生($M=3.05, SD=1.32$)に比べ短大生($M=4.24, SD=0.87$)のほうが有意に得点が高い($t(169.34)=7.15, p<.001$)。このことは、短大生では進学以前の比較的早期から進路目標が明確にされており、学部・学科選択もその進路目標に整合したものが選択されていることを示唆している。

3) 現在の専攻・専門と就職との関係

所属する大学・短大の講義・演習科目の内容が、進路を決める上でどれくらい役立ったかについて5段階で評定させたところ、全体平均が3.63 (SD=1.06) となり、カリキュラムの有用性がある程度認められているが、短大生 (M=4.40, SD=0.66) が大学生 (M=3.21, SD=1.01) に比べて評価得点が有意に高い ($t(169.89) = 9.42, p < .001$)。

さらに、現在の専攻・専門と就職との関係についての回答では、全体の有効回答179名のうち58名 (32.4%) が「なるべく専攻・専門をいかせる仕事につきたい」を選んでおり最も多い。これに「ぜひとも専攻・専門との関連のある仕事につきたい (20.7%)」、および「就職のときにはいかせなくても、将来は専攻・専門と関連のある仕事につきたい (21.8%)」を加えると7割以上が、何らかの形で大学・短大で学んだ専門知識・技能を活用できる就職を求めている。一方で「現在の専攻・専門と就職とは関連しなくてよい」と答えた者が24.0%存在する。これを所属区分で比較すると、大学生と短大生において回答の違いが有意であり ($\chi^2(4) = 23.10, p < .001$)、残差分析の結果、「ぜひとも」の選択肢において短大生 (36.5%) の選択割合が大学生 (11.5%) に比べて有意に高い。逆に「関連しなくてよい」では大学生 (32.7%) の選択割合が短大生 (7.9%) に比べて有意に高い。その他の選択肢については大学生・短大生の回答傾向に差異はみられなかった。

以上の大学生・短大生比較から、短大生のほうが大学生に比べ進学以前の比較的早期から進路目標を明確にしており、専門・専攻カリキュラムの評価が高く、学んだことを仕事に活かしたいと強く望んでいることが示された。しかし、これらの結果から短大生が大学生よりも明確な就業意識を形成しており、かつ就職に有利であると結論づけることは拙速であろう。先述したように、本研究の調査サンプルの場合、性別の効果と所属学部・学科の特性の効果が交絡している可能性があるからである。すなわち、短大生サンプルが女性のみで構成されており、幼稚園教諭など特定の資格取得を目指した単一型のカリキュラムを掲げた学科・専攻の学生を多く含むことから、それらの特性が結果に影響を及ぼしていることが考えられる。

3. 進路目標決定の状況

1) 進路目標と就職活動および内定状況との関係

調査対象者のうち、卒業後の進路について「一つに決めている (以下、決定群)」と答えた者は83名 (47.2%)、「やりたいことがいろいろあって一つに決められない (以下、拡散群)」を選んだ者が57名 (32.4%)、「やりたいことが見つからない (以下、未定群)」とする者は36名 (20.5%) であった。卒業後の進路目標を決めて

いる者に具体的進路を選択させたところ、最も多いのは「公務員・教員 (34名; 42.0%)」であり、次いで「県内企業 (25名; 30.9%)」であった。「進学」と「留学」は合わせても6名 (7.2%) に過ぎず、進路目標決定者の多くは卒業後に就職を希望していると考えられる。しかしながら、「県外企業」への就職を目指す者はわずかに3名 (3.7%) に留まり、依然として沖縄県の大学生・短大生の県内指向、公務員指向は根強いものがある。

進路目標の決定状況の3群 (決定・拡散・未定) について、過去一年間における進路のための準備・活動の有無を尋ねた結果を図2に示す。

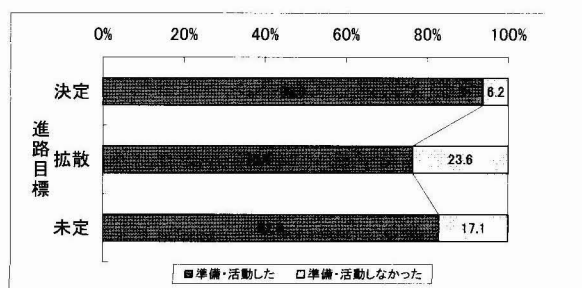


図2 進路目標と就職活動

卒業2ヶ月前の調査時点で、進路目標を一つに決定している者 (83名) のうち、93.8%は進路のための準備・活動をしたと答えており、進路目標が拡散している者 (57名) における準備・活動経験者の割合76.4%を上回っている。興味深いのは、進路目標が未だ定まっていない者 (36名) においても、82.9%は何らかの準備・活動をおこなったと答えている点である。

具体的な準備・活動としては、回答者全体 (146名) のうち43.9%が「採用試験を受験」を挙げており、次いで「資料請求」36.7%、「職場訪問」「資格・検定取得」がともに27.2%となっている。

それらの準備や活動が現実的に就職・採用内定の獲得へと結実したかは、以下の内定状況に関する結果を検討することで明らかになるだろう。

進路決定の現状について回答した170名のうち、第一希望の進路に内定が決定している者は33名 (19.4%) であり、内定連絡待ちが10名 (5.9%)、内定未定 (進路未決定) が127名 (74.7%) となっており、卒業年の1月～2月期においても卒業予定者の4分の3が内定を獲得していないという厳しい状況が示されている。

内定獲得状況を進路目標設定の3群 (決定・拡散・未定) とクロス集計した結果を表1に示した。 χ^2 検定の結果、進路目標の設定の仕方 (3群) と内定獲得状況の間には有意な関連が認められた ($\chi^2(4) = 27.79, p < .001$)。進路目標決定群では33.8%が第一希望の内定を獲得しており、内定連絡待ち (10.0%) を合わせると43.8%が卒業後の進路の目途が立っている。一方、拡散群と未定群では、内定済みは7.1%以下であり、内

表1 進路目標の決定状況と内定獲得との関係

内定獲得状況	進路目標		
	決定	拡散	未定
第一希望内定済み	27 (33.8)	4 (7.1)	2 (5.9)
内定連絡待ち	8 (10.0)	2 (3.6)	0 (0.0)
内定未定(進路未決定)	45 (56.3)	50 (89.3)	32 (94.1)

$$\chi^2(4) = 27.79, p < .001$$

注) 表中の数値は度数。かっこ内は列パーセント。

定連絡待ちを合わせても11%以下に止まり、逆に進路未決定が89%以上に達している。

これらの結果から、進路目標を明確に決めないまま就職活動などを行っても、それが内定獲得などの成果には結びつきにくいことが示唆される。言い換えれば、内定を勝ち取るためには、早い時期から自己の興味・適性を把握し、進路目標を明確にした上で、合目的かつ効果的な情報収集と就職活動を実践することが重要であることを示している。

ただし、本研究の場合、卒業を控えた1月～2月期における1回限りの調査であるため、進路目標決定と内定獲得との関係には、目標決定から内定獲得へという因果の他に、第一希望の内定が決定したことにより卒業後の進路を一つに決めた、というような因果のパスを逆転した説明も成り立ちうる。実際に進路目標を明確にすることが内定獲得を促進するのか、その因果関係については、就職活動初期と末期における追跡的な調査を実施することでより明確にしていくことができるであろう。この点は今後の研究課題としたい。

2) 進路目標と卒業後の生活予測

ところで、進路目標を定めていない拡散群や未定群の学生達は、このまま卒業しても経済的に困らない状況にあるのだろうか。卒業後の生活費、卒業後に家計を助ける必要性、就職先を世話してくれる家族や知り合いの有無の3点について、進路目標設定の3群(決定・拡散・未定)とのクロス集計を行った。集計にあたって、卒業後の生活費に関しては、選択肢の「大丈夫ではない」と「どちらかといえば大丈夫でない」を合算し、「充分大丈夫」と「どちらかといえば大丈夫」を合算して集計した。また家計を助ける必要性についても同様に、「必要ではない」と「どちらかといえば必要でない」、「非常に必要である」と「どちらかといえば必要である」をそれぞれ合算して集計した。

χ^2 検定の結果、進路目標の設定の仕方と生活費不安の間には5%水準で有意な関連が認められたが($\chi^2(2) = 6.91, p < .05$)、特に未定群において不安を感じている者の割合が高い(82.9%)。一方、拡散群では卒業

後の生活費について楽観視している者が他の群に比べて多い(43.9%)。

卒業後に家計を助ける必要性については、進路目標決定群(82名)のうち56名(68.3%)が「家計を助ける必要がある」としている。拡散群(57名)では34名(59.6%)が、未定群(36名)では30名(83.3%)が「家計を助ける必要がある」と回答している。ここでも、拡散群において家庭の経済状況を比較的楽観視する傾向が、また未定群では家計を助ける必要性を高く見積もる傾向がみられた($\chi^2(2) = 5.75, p < .10$)。

就職先を世話してくれる家族や知り合いの有無と進路目標設定の3群の間には、有意な関連は認められなかった。

これらの結果から、進路目標が未決定の者は、卒業後の経済状況について楽観視しているがために未決定の状態に甘んじているわけではなく、将来についての経済的不安を強く感じながらも進路を決定できていない実態が示された。卒業後の経済状況について楽観視する傾向は、むしろ拡散者において高いようである。いずれにしても、経済的必要性の程度やその認識が、進路目標を絞り込み決定させることを後押しする規定因にはなっていないことが示唆される結果である。

4. 進路目標の決定と就業意識

高良・金城・廣瀬(2004)に基づき、職業選択基準尺度の6つの因子を構成する項目群についてクロンバックの α 係数を算出して尺度の信頼性を検討した結果、それぞれ「職務挑戦」(5項目; $\alpha = .861$)、「社会的貢献」(5項目; $\alpha = .827$)、「雇用条件」(5項目; $\alpha = .592$)、「人間関係」(3項目; $\alpha = .834$)、「地元志向」(3項目; $\alpha = .680$)、「勤務制度」(4項目; $\alpha = .665$)であった。「雇用条件」に関しては α 係数がいくぶん低いが、概念的なまとまりのよさと先行研究との一貫性をもたせるために、そのまま採用した。職業選択基準尺度に関する以下の分析では、各因子ごとに項目の得点を加算合計して6つの下位尺度得点とした。

また、職業レディネス尺度5項目、進路選択に対する自己効力感尺度5項目に関して、高良・金城・廣瀬(2004)と同様に、それぞれ1因子構造を仮定し α 係数を算出したところ、それぞれ $\alpha = .594$ 、 $\alpha = .809$ という値を得た。これにより職業レディネス、自己効力感とも各尺度を構成する5項目の得点を加算合計して分析に用いた。

表2は、進路目標決定(83名)、拡散(57名)、未定(36名)の各群ごとに、職業選択基準尺度の下位尺度および職業レディネス尺度、自己効力感尺度の平均値を示している。一元配置の分散分析の結果、雇用条件について進路目標決定の有意な効果($F(2,171) = 3.14, p < .05$)がみとめられ、職務挑戦で傾向あり($F(2,169)$

=2.40, $p<.10$) という結果が得られた。LSD 法による下位検定の結果、雇用条件に関しては、未定群 ($M=19.50, SD=2.33$) で得点が高く、決定群 ($M=18.08, SD=2.90$) とのあいだに有意な差があった。一方、職務挑戦に関しては、拡散群 ($M=19.56, SD=2.90$) は未定群 ($M=18.00, SD=3.61$) と比べ相対的に得点が高くなる傾向が認められた。

表2 進路目標の決定状況の違いが職業選択基準の重視度、職業レディネス、進路選択に対する自己効力感に及ぼす効果

	進路目標			F 値
	決定	拡散	未定	
《職業選択基準》				
職務挑戦	18.84ab (3.51) $n=80$	19.56a (2.90) $n=57$	18.00b (3.61) $n=35$	2.40 ⁺
社会貢献	14.90 (2.95) $n=82$	15.11 (2.86) $n=56$	14.03 (2.26) $n=36$	1.77
雇用条件	18.08a (2.90) $n=83$	18.35ab (2.89) $n=57$	19.50b (2.33) $n=34$	3.14*
人間関係	13.28 (1.99) $n=83$	12.89 (2.27) $n=57$	12.83 (1.93) $n=36$	0.85
地元志向	10.54 (2.91) $n=82$	10.68 (2.88) $n=57$	11.58 (2.76) $n=36$	1.73
勤務制度	15.37 (2.95) $n=83$	15.49 (2.31) $n=57$	15.44 (2.57) $n=36$	0.03
《職業レディネス》	15.85a (2.03) $n=81$	15.34a (2.21) $n=56$	13.63b (1.78) $n=35$	14.55***
《自己効力感》	14.21a (3.01) $n=80$	13.23b (2.38) $n=57$	11.36c (2.45) $n=36$	13.82***

⁺ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

注1) 表中のかっこ内は標準偏差

注2) 各下位尺度の得点範囲は、職務挑戦・雇用条件が5~25点、社会貢献・勤務制度が4~20点、人間関係・地元志向が3~15点、自己効力感・職業レディネスが5~20点である。

注3) 異なるアルファベットが付された平均値のあいだに有意差がある。

これらの結果から、進路目標が未定である者は、仕事を通じて自らの成長や挑戦の機会を得るとのことよりも、仕事に付随する雇用条件、すなわち給与や福利厚生などの処遇面を重視した職業選択を行いがちであることが推測される。

職業レディネス ($F(2,169)=14.55, p<.001$)、自己効力感 ($F(2,170)=13.82, p<.001$) に関しては、いずれも進路目標決定の効果が有意であった。職業レディネス

では進路未定群 ($M=13.63, SD=1.78$) が、決定群 ($M=15.85, SD=2.03$) や拡散群 ($M=15.34, SD=2.21$) に比べて有意に得点が低かった。自己効力感では進路決定群 ($M=14.21, SD=3.01$)、拡散群 ($M=13.23, SD=2.38$)、未定群 ($M=11.36, SD=2.45$) の3群間にそれぞれ有意差がみとめられ、未定群において自己効力感が最も低くなっている。すなわち、進路目標が定まらない学生達にとっては、自己の適性・能力把握や、それに基づいた職業選択への準備状態が卒業を間近に控えた調査時点においても未成熟であることを示唆している。このことは、自己効力感が進路選択行動や進路探索に及ぼす影響を検討した富安 (1997) の指摘とも符合し、大学・短期大学におけるキャリア教育上の重大な課題であるといえよう。

以上の分析から、進路目標を明確にすることが、職業レディネスや職業選択に対する自己効力感と密接に関連し、ひいては就職・採用内定にも肯定的な効果を持つことが示された。それでは、進路目標の明確化を促進するためにはどのような条件が必要になるのだろうか。この観点から、以降の分析では、働く人のモデルおよび情報源の効果を検討するとともに、内定獲得者とそうでない者とが、それぞれ内定獲得の原因をどのように帰属しているのかについてみていく。

5. 働く人のモデルの有無と進路目標

「将来こんなふうになりたい」という働く人のモデルを持つことは、大学生・短大生の進路目標決定に促進的な影響を及ぼすのであろうか。働く人のモデルを持っている者は、有効回答者176名のうち52名 (29.5%) であり、モデルがない者は124名 (70.5%) であった。このうち、大学生 (111名) ではモデル有り23.4%、モデル無し76.6%なのに対して、短大生 (63名) ではモデル有り39.7%、モデル無し60.3%と、短大生の方が働く人のモデルを持っている者の割合が相対的に高くなっている ($\chi^2(2)=5.13, p<.05$)。

図3は、働く人のモデルの有無別に3つの進路目標に含まれる人数の比率を示している。働く人のモデルがあると答えた者のうち61.5%が進路決定をおこなっており、モデルをもっていない者における進路目標決定者42.1%と比べ大きな差異がある。逆に、進路未定者の比率は、モデル無しで25.6%、モデル有りで7.7%となっていた。目標拡散者の比率は、モデルの有無によって違いはほとんどみられない (モデル有り: 30.8%、モデル無し: 32.2%)。

この結果は、進路目標を決定する上で、働く人のモデルをもっていることが重要な規定因であることを示唆している。「将来こんなふうになりたい」と憧れる人物のモデルをもつことは、大学・短大生にとって職業人としてのアイデンティティ形成や職務特性への理解

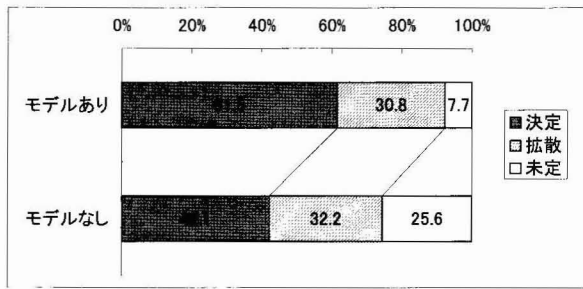


図3 働く人のモデルの存在と進路目標

を深める契機となっていると考えられる。ところで、モデルとして選ばれるのはどのような人物であろうか。本研究では、自由記述によってモデルとの間柄を回答させた。その結果、最も多かったのは「先生（13名）」であり、次いで「父・母・姉（12名）」、「先輩・友達（6名）」であった。やはり、両親や先生、先輩など身近な人物がモデルとなることが多いようである。これらのモデルは、特定の職種・業種への選好というより、働いている姿が具体的に見えるために職務内容が容易にイメージできる人物といえよう。

6. 進路目標決定に寄与する情報源

進路目標を一つに決定している学生（83名）を対象として、その進路を決定するのにあたって、どのような情報源が役に立ったか、提示された7項目に関してそれぞれ有用性を評定させた。その結果、得点の高い

順に列記すると「大学就職課の情報（ $M=3.83, SD=1.33$ ）」、「就職／採用／進学／留学先が提供する募集要項（ $M=3.72, SD=1.23$ ）」、「先輩・友人からのアドバイス（ $M=3.67, SD=1.03$ ）」、「指導教員からのアドバイス（ $M=3.64, SD=1.08$ ）」、「両親・親戚からのアドバイス（ $M=3.37, SD=1.15$ ）」、「インターネットにおける検索情報（ $M=3.36, SD=1.24$ ）」、「就職情報誌の記事（ $M=3.09, SD=1.29$ ）」となった。いずれも5段階評価の3点を超えており、それぞれの情報源が活用されているといえる。

内定連絡待ちの学生数は相対的に少なく、また状況が曖昧であるため以下の分析からは除外し、内定決定群（26名）と内定未定群（45名）について、各情報源の有用性評定を比較した（表3）。その結果、「就職／採用／進学／留学先が提供する募集要項」（ $t(69)=2.33, p<.05$ ）、「大学就職課の情報」（ $t(69)=2.21, p<.05$ ）において両群間の平均値に有意な差が認められ、「指導教員からのアドバイス」（ $t(69)=1.70, p<.10$ ）に傾向が示された。いずれの情報源についても内定決定群が内定未定群に比べて有用性を高く評価していた。

下村・堀（2004）は、大学生の就職活動における情報探索活動に関して、インターネット上の就職サイト、OB／OG、友人の3つの情報源から入手される情報の機能について検討している。その結果、時系列的にみると就職サイトの情報源としての価値は就職活動終盤では低下すること、同性の友人からの情報は終始重

表3 内定決定・未決定別にみた進路情報源の有用性評定

項目		内定決定	内定未決定	t 値
1. 就職情報誌の記事	平均	3.04	3.04	n.s.
	SD	1.34	1.26	
	n	26	45	
2. 就職／採用／進学／留学先が提供する募集要項	平均	4.19	3.51	2.33*
	SD	1.06	1.25	
	n	26	45	
3. 大学就職課の情報	平均	4.27	3.56	2.21*
	SD	1.12	1.41	
	n	26	45	
4. インターネットにおける検索情報	平均	3.50	3.40	n.s.
	SD	1.07	1.29	
	n	26	45	
5. 指導教員からのアドバイス	平均	3.84	3.40	1.70 ⁺
	SD	1.26	0.94	
	n	26	45	
6. 先輩・友人からのアドバイス	平均	3.73	3.65	n.s.
	SD	1.00	1.02	
	n	26	43	
7. 両親・親戚からのアドバイス	平均	3.42	3.36	n.s.
	SD	1.06	1.21	
	n	26	45	

注) 得点範囲は、いずれも1～5点

⁺ $p<.10$, * $p<.05$

要視される反面、実際の就職活動結果には結びつかないこと、OB/OG訪問によって得る情報は就職活動終盤において重要度が高くなり、就職活動成果にも直接的に結びつきやすいことを指摘している。下村・堀(2004)に従えば、「先輩・友人からのアドバイス」の項目はさらに高い順位を示しても良いと考えられるが、本研究の調査対象者の場合、人的つながりよりも就職課の求人情報や募集要項などの一次資料をより重視する傾向が示されている。

7. 就職・採用内定達成に関する原因帰属

情報源に関する分析と同様に、進路目標を決定している者の中で、内定決定群(27名)と内定未定群(45名)に区分し、就職達成の原因に関する帰属因子ごとの関連性の評定平均値を比較した(表4)。t検定の結果、群間に差がみられたのは、「試験・面接のときの頑張り」($t(37.95) = -3.05, p < .01$)、「日頃の努力の積み重ね」($t(38.89) = -1.96, p < .10$)の2項目であり、いずれも内定未定群において平均値が高かった。これらは、内面的かつ統制可能である点で共通する帰属因子であり、内定未定群において関連性が高く評定されたのは、今後の就職活動の動機づけを維持するために必要

なことだと思われる。一方、内定決定群の帰属得点が内定未定群よりも高いのは「運のよさ」および「先生・親の助け」という、いずれも外的で不安定な帰属因であったが、平均値の差は統計的に有意ではなかった。

今後の課題

本研究では、卒業を間近に控えた時期(2004年1月～2月)における大学・短大最終学年の学生を対象として、職業選択基準、職業レディネス、職業選択に対する自己効力感など一連の認知変数ならびに、調査時点における実際の就職・採用内定状況について調査した。結果の分析に際しては、進路目標の決定状態を分類基準として、進路目標決定・拡散・未定の3群における差異を比較検討した。進路目標を一つに決定している者ほど職業レディネスや職業選択に対する自己効力感が高く、実際の就職・採用内定の獲得状況も良いことが示された。とはいえ、卒業年の1月～2月期においても卒業予定者の4分の3が内定を獲得していないこと、また卒業後の進路目標が定まらない者が拡散群・未定群を合わせて対象者の5割を越えている事実は、現在の大学・短大生の進路決定における深刻な問題を提起している。

表4 内定決定・未決定別にみた就職達成原因帰属の評定

項目		内定決定	内定未決定	t 値
1. 試験・面接の難易度 (外的・安定・統制不可能)	平均	3.78	3.98	n.s.
	S D	1.34	1.01	
	n	27	45	
2. 試験・面接の時のがんばり (内的・不安定・統制可能)	平均	3.52	4.33	- 3.05**
	S D	1.25	0.77	
	n	27	45	
3. 自分の適性・能力 (内的・安定・統制不可能)	平均	4.15	4.18	n.s.
	S D	0.82	0.61	
	n	27	45	
4. 運の良さ (外的・不安定・統制不可能)	平均	3.85	3.47	n.s.
	S D	1.10	0.92	
	n	27	45	
5. 試験・面接当日の体調・気分 (内的・不安定・統制不可能)	平均	3.70	3.84	n.s.
	S D	1.03	0.93	
	n	27	45	
6. 日頃の努力の積み重ね (内的・安定・統制可能)	平均	3.93	4.38	- 1.96+
	S D	1.07	0.68	
	n	27	45	
7. 採用・面接試験問題の傾向 (外的・安定・統制可能)	平均	3.48	3.84	n.s.
	S D	1.22	1.01	
	n	27	44	
8. 先生・親の助け (外的・不安定・統制可能)	平均	3.81	3.44	n.s.
	S D	1.14	0.94	
	n	27	45	

+ $p < .10$, ** $p < .01$

注1) 括弧内は原因帰属の特徴を示す

注2) 得点範囲は、いずれも1～5点

今後、職業選択に対する効力感や職業レディネスを高揚し、キャリア発達と進路意思決定を促進・支援するための具体的カリキュラムを充実させることが、高等教育機関に対してより強く求められてくるであろう。

そうした進路決定支援の具体策を講じる上で、次の3つの観点が重要になってくると考えられる。1つは、廣瀬・高良・金城(2004)が検討した学部・学科の単一型/多様型カリキュラムの概念のような、教育機関が提供する知識・専門性と進学者の意図ないしは進学前の進路意思決定との相互作用過程に関する分析視点であり、2つ目には、個々の学生の進路目標の明確化から就職活動、そして実際の内定獲得に至る認知・行動過程を時系列的に説明しうる因果モデルの構築である。3つ目に、本研究で明らかとなった働く人のモデルの存在とその影響過程があげられる。この働く人のモデルの影響過程については、それがキャリア発達のどの時点で効果を持つのかなどを明らかにするために、カリキュラムや進路目標などの点でより等質な集団を対象として、今後も詳細に検討していく予定である。

付 記

本研究の一部は、日本教育心理学会第46回総会(2004)において発表された。

引用文献

淵上克義, 「進学志望の意思決定過程に関する研究」, 『教育心理学研究』, 32, 59-63, 1984.
 廣瀬 等・高良美樹・金城 亮, 「大学新入生の学部・学科選択と就業意識に関する研究—学部・学科種別による比較検討—」, 『琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学』, 13, 241-266, 2004.
 文部科学省, 「平成16年度学校基本調査」(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/05011201/004.htm), 2005.

沖縄県労働局職業安定部職業安定課, 「新規学卒者の求人・求職・就職の状況(平成16年3月末現在)沖縄県計」, 『学生等就職問題連絡会議』, 7, 2004.
 下村英雄・堀 洋元, 「大学生の就職活動における情報探索行動: 情報源の影響に関する検討」, 『社会心理学研究』, 20, 2, 93-105, 2004.
 高良美樹・金城 亮, 「インターンシップの経験が大学生の就業意識に及ぼす効果—職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として—」, 『琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学』, 8, 39-57, 2001.
 高良美樹・金城 亮・廣瀬 等, 「沖縄県の大学生における就業意識についての基礎的研究」, 『琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学』, 11, 331-357, 2003.
 高良美樹・金城 亮・廣瀬 等, 「沖縄県の大学生・短期大学生における就業意識についての基礎的研究(2)」, 『琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学』, 13, 203-221, 2004.
 富安浩樹, 「大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連」, 『教育心理学研究』, 45, 329-336, 1997.
 浦上昌則, 「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」, 『名古屋大学教育学部紀要 教育心理学』, 42, 115-126, 1995.
 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子, 「職業レディネスと職業選択の構造—保育系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と就業意識との関連—」, 『名古屋大学教育学部紀要』, 30, 63-98, 1983.
 若松養亮, 「大学生の進路未決定者が抱える困難さについて—教員養成学部の学生を対象に—」, 『教育心理学』, 49, 209-218, 2001.

付録 質問紙の調査項目

問1. あなたが就職活動をする際に、以下のことをどの程度重視しますか（重視しましたか）。それぞれの項目について、自分の気持ちにもっとも近い程度を1つ選んで、数字に○印をつけてください。

	重 ま つ た く し な い	重 あ ま り し な い	ど ち ら と も い え な い	あ る 程 度 重 視 す る	非 常 に 重 視 す る
1 安定した会社や勤め先であること	1	2	3	4	5
2 給与やボーナスが高いこと	1	2	3	4	5
3 創造性・独創性を発揮する機会があること	1	2	3	4	5
4 勤め先の福利厚生施設が充実していること	1	2	3	4	5
5 昇進の可能性が高いこと	1	2	3	4	5
6 上司との人間関係がよいこと	1	2	3	4	5
7 仕事仲間との人間関係がよいこと	1	2	3	4	5
8 困難な仕事へ挑戦する機会があること	1	2	3	4	5
9 社会的責任のある仕事であること	1	2	3	4	5
10 家庭的な雰囲気職場であること	1	2	3	4	5
11 仕事をつうじて社会に役立つこと	1	2	3	4	5
12 自分の能力がためされる機会があること	1	2	3	4	5
13 仕事をつうじて勉強し成長する機会があること	1	2	3	4	5
14 自分の力で何事かを成しとげる機会があること	1	2	3	4	5
15 職場のみんなから受け入れられること	1	2	3	4	5
16 終身雇用制であること	1	2	3	4	5
17 人の役に立つ仕事であること	1	2	3	4	5
18 勤務地が地元（出身地）であること	1	2	3	4	5
19 勤務時間に柔軟性（フレックス・タイムなど）があること	1	2	3	4	5
20 取得した資格が活用できる機会があること	1	2	3	4	5
21 職場が男女平等であること	1	2	3	4	5
22 有給休暇（介護、育児など）制度が充実していること	1	2	3	4	5
23 現在の居住地から通勤可能であること	1	2	3	4	5
24 転勤がないこと	1	2	3	4	5
25 社会に貢献している実感がもてること	1	2	3	4	5

問2. あなたは、現在の専攻・専門と就職との関係についてどのように考えていますか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1 ぜひとも専攻・専門と関連のある仕事につきたい
- 2 なるべく専攻・専門をいかせる仕事につきたい
- 3 就職のときはいかせなくても、将来は専攻・専門と関連のある仕事につきたい
- 4 現在の専攻・専門と就職とは関連しなくてよい
- 5 その他 (具体的に記入：))

問3. 仕事についてのあなたの考えをおたずねします。次の各文について、あなたの考えにあてはまる番号に○印をつけてください。

	あ ま っ た く あ て は ま ら な い	あ や あ て は ま ら な い	や あ て は ま る	非 常 に あ て は ま る
1 自分は職業の上で将来の目標があるので、それを実現させるために自分でいろいろ考えてやってみる	1	2	3	4
2 自分の選んだ職業を通じて、自分にどれだけ力があるのか確かめてみることに、大きな関心をもっている	1	2	3	4
3 将来の職業のことについては、できるだけ考えないようにしている	1	2	3	4
4 自分が興味を持っている職業の内容は十分知っているので、就職のためにどのような条件が必要であるかはよくわかっている	1	2	3	5
5 自分の職業は自分で選び、その選択に対して自分で責任を負う必要がある	1	2	3	5

問4. 次の各文について、あなたはどれくらい自信がありますか。あなたの自信の程度にあてはまる番号に○印をつけてください。

	自 ま っ た く 自 信 が な い	自 や あ た り ま か ら ず 自 信 が な い	自 や あ た り ま か ら ず 自 信 が あ る	自 非 常 に あ た り ま か ら ず 自 信 が あ る
1 自分の将来設計にあった職業を探ること	1	2	3	4
2 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと	1	2	3	4
3 自分の理想の仕事を思い浮かべること	1	2	3	4
4 自分が従事したい職業(職種)の仕事内容を知ること	1	2	3	5
5 将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること	1	2	3	5

問5. あなたには、将来こんなふうになりたいという働く人のモデルがありますか。
また、その人とあなたとは、どのような間柄ですか？

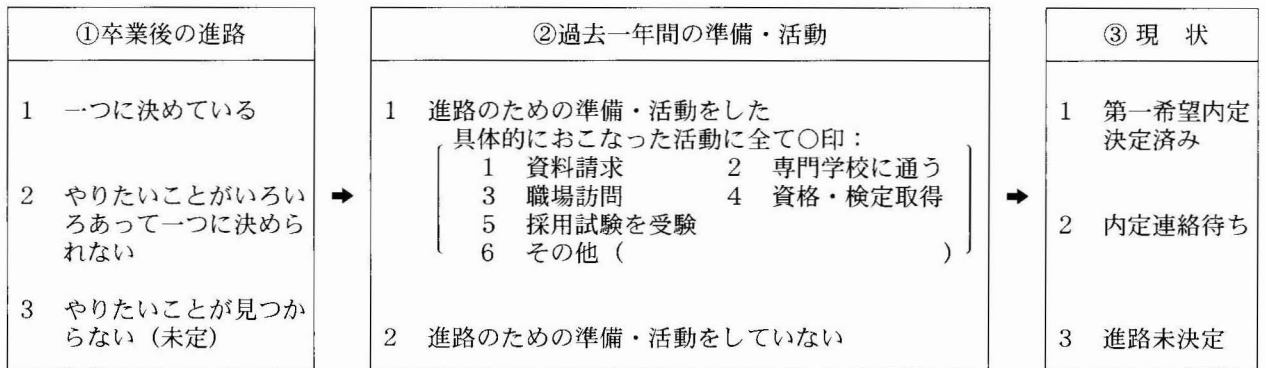
1. 働く人のモデルの有無 : 1 いる 2 いない
 ↓
2. 働く人との間柄： (具体的に))

問6. あなたは、何のために働く(仕事をする)のですか。以下のことがらのうち、あなたの考えにあてはまるものすべてに○印をつけてください。

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 達成感を得るため | 2 自分の能力や創造性を発揮するため |
| 3 趣味や興味を仕事で実現するため | 4 余暇や趣味に使うお金を得るため |
| 5 職場の人々や顧客との交流のため | 6 地域や社会に貢献するため |
| 7 社会の一員として認められるため | 8 自分自身や家族の生活の糧を得るため |
| 9 働かないのは世間体が悪い | 10 その他 |
- (具体的に記入：)

問7. 以下の質問は、最終年次の皆さんにおたずねする質問です。(それ以外の方は最後のページの【問8】に進んでください。)

- あなたは、在学中にアルバイトをしていましたか。
 - アルバイトをしていた
 - アルバイトをしていない
- 卒業後すぐに就職しなくても、来年度の生活費は大丈夫だと思いますか。
 - 大丈夫ではない
 - どちらかといえば大丈夫でない
 - どちらかといえば大丈夫
 - 十分大丈夫
 - その他()
- 卒業後すぐに就職して、あなたが家族の家計を助ける必要性はどれくらいあると思いますか。
 - 必要ではない
 - どちらかといえば必要でない
 - どちらかといえば必要である
 - 非常に必要である
- もし、あなたが卒業後の進路を決めないまま、卒業して社会に出た場合、就職先を世話してくれる家族や知り合いはいますか。
 - いる
 - いない
 - わからない
- 卒業後の進路に関して、以下の①～③の各質問について、あてはまる数字に○印をつけてください。



6. 上の問5①で進路を「一つに決めている」を選んだ方におたずねします。(それ以外の方は、最後のページの【問8】に進んでください)

6-1. 具体的にはどのような進路を決めていますか。以下の項目のうち1つを選んでください。

- | | | | |
|---------------|--------------|----------|----------------|
| 1 県内企業 | 2 県外企業 | 3 公務員・教員 | 4 進学(大学院・専門学校) |
| 5 留学(留学先：) | 6 一時雇用・アルバイト | | |
| 7 その他(具体的に：) | | | |

6-2. その進路を決定するのにあたって、どのような情報源が役に立ちましたか。以下の項目について役立った程度をお答えください。

	役 立 た な い	ま つ た く	あ ま り 役 立 た な い	ど ち ら と も い え な い	あ る 程 度 役 に 立 つ た	非 常 に 役 に 立 つ た
1 就職情報誌の記事	1	2	3	4	5	
2 就職／採用／進学／留学先が提供する募集要項	1	2	3	4	5	
3 大学就職課の情報	1	2	3	4	5	
4 インターネットにおける検索情報	1	2	3	4	5	
5 指導教員からのアドバイス	1	2	3	4	5	
6 先輩・友人からのアドバイス	1	2	3	4	5	
7 両親・親戚からのアドバイス	1	2	3	4	5	

6-3. その進路に進むことを決定したのは、いつ頃ですか。

- 1 大学・短大入学以前 2 大学・短大1年次のとき 3 大学・短大2年次のとき
4 大学3年次のとき 5 大学4年次のとき 6 その他（ ）

6-4. あなたの就職・採用が内定することと、次にあげることがらはどれくらい関連していると思いますか。あてはまるところに○印をつけてください。

	関 連 し て い な い	あ ま り 関 連 し て い な い	ど ち ら と も い え な い	あ る 程 度 関 連 し て い る	非 常 に 関 連 し て い る
1 試験・面接の難易度	1	2	3	4	5
2 試験・面接当日の頑張り	1	2	3	4	5
3 自分の適性・能力	1	2	3	4	5
4 運の良さ	1	2	3	4	5
5 試験・面接当日の体調・気分	1	2	3	4	5
6 日頃の努力の積み重ね	1	2	3	4	5
7 採用・面接試験問題の傾向	1	2	3	4	5
8 先生・親の助け	1	2	3	4	5

6-5. あなたが所属する学部・学科で学んだことは、あなたの就職・採用内定に役立つ（役立った）と思いますか。

- 1 全く役立たない 2 どちらかというと役立たない 3 どちらともいえない
4 どちらかというと役立つ 5 非常に役立つ

問8. 最後に、あなた自身のことについておたずねします。該当する数字を○で囲むか、カッコ内にあてはまる答えを記入してください。

- 1 あなたの年齢： () 歳
- 2 あなたの性別： 1 男 2 女
- 3 あなたの出身地： 1 沖縄県 2 沖縄以外の都道府県 ()
 3 日本以外の国 ()
- 4 あなたの学部・学科等： 学部 () 学科等 ()
- 5 あなたの学年： 1 一年 2 二年 3 三年 4 四年 5 大学院 6 その他
- 6 学部・学科を選択する際、卒業後の進路を考慮して選択しましたか。

1 全く考慮しなかった 2 どちらかというと考えしなかった 3 どちらともいえない
4 どちらかというと考えした 5 非常に考慮した
- 7 あなたはこの大学・短大の講義・演習科目の内容が、進路を決める上でどれくらい役立つ(役立った)と思いますか。

1 全く役立たない 2 どちらかというと役立たない 3 どちらともいえない
4 どちらかというと役立つ 5 非常に役立つ
- 8 大学・短大卒業後のあなたの進路を決める上で、特に影響を与えた経験がありましたか。あれば、できるだけ具体的に記入してください。